

清河八郎 「西遊草の道」

「元氣・まちネット」踏査後半同行記

1

庄内町清川出身の幕末の志士、清河八郎(1805-1855)(安政2年、母を連れて全国を旅行し、旅日記「西遊草」を書いた。東京のNPO法人「元氣・まちネット」(矢口正武代表)戸沢村出身)は、その奥内ルートを「西遊草の道」と名付けて踏査。8月に清川から鶴岡市中心部、湯田川などを経て新潟県境までを訪ねたのに続き、今月、福島県境から旧板谷街道、羽州街道などをたどり清川まで、日記の記述に沿って検証した。以下は踏査後半の同行記。

(文)鶴岡支社・伊藤哲哉、写真(同)・色摩高幸

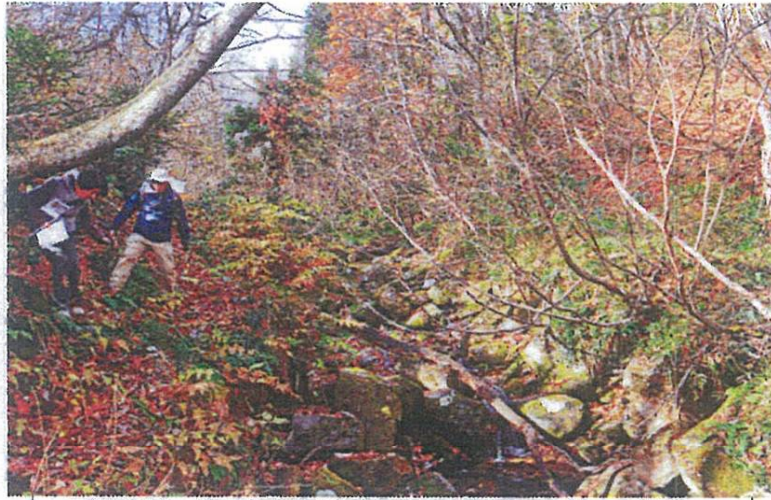
「西遊草」は、清河八郎が母の亀代を清川から伊勢参りに連れて行き、蔵島神社(広島県)や錦帯橋(山口県)まで足を伸ばした際の道中記。帰路は江戸に1カ月ほど滞在し、日光(栃木県)、福島を経由して米沢から本奥内陸部を北上した。春に出发した清川へ戻ったのは秋も深まったころで、5カ月半もの大旅行となった。日記は母が老後に読んで楽しめるように、また、弟や妹が伊勢参りをする際の参考になるように各地の風物、風俗などを筆まめに記している。

八郎親子は、下男貞吉と、八郎の同志で江戸から同行した安積五郎を伴い、板谷街道を通過して上杉領に入った。当初は桑折(福島県)、七ヶ宿(宮城県)を経て上山に入る予定だったが、1809(文化6)年に七ヶ宿で庄内藩士が宿の主人を無礼討ちにして同藩と仙台藩が争ったことなどもあり、母を連れ旅で無用のトラブルを避けるため板谷越えをしたらしい。

江戸時代、米沢と福島の間

石畳、落ち葉に埋もれ

板谷街道から上杉領へ



「山神橋」近くから旧街道に入ると沢沿いの美しい風景に出合った
=米沢市

Q 清河八郎 1800(天保元)年生まれ。清川村(庄内町清川)の裕福な酒造家の長男。16歳で学者を志して家出した。江戸で学問と剣の修業を積んで塾を開いた。その後、尊王攘夷(じようい)の急進派と「虎尾の会」を結成。奉行所の手先

とみられる男を斬って逃亡生活に入った。潜伏しながら藩士の志士を結び付けたが、薩摩の尊攘過激派が薩摩藩士に討たれた寺田屋事件で挫折した。63(文久3)年には幕府に働き掛け浪士組を組織。同年暗殺された。浪士組は新選組、新選組となった。

米は、現在のJR奥羽本線に沿って板谷峠を越える板谷街道(福島街道)が主で、上杉氏の参勤交代やコメの輸送にも使われた。板谷(米沢市)は宿場として栄え、藩主が泊まる「板谷御殿」もあった。「西遊草」(東洋文庫、小山松勝一郎編訳)には、「幸平(福島市)の本陣で休み、板谷に帰る牛を雇う」とある。馬でなく牛を使って国境を越えたようだ。

八郎は板谷の関所について「米沢市史」によると、米

地区会長の鈴木吉雄さん(75)によると、板谷は戦後、白土(ろう石クレー)の鉱山で活気にあふれ、最盛期には1200戸あったが、現在は35戸に減った。「街道の名残なのか昔は集落内の道が石畳だった。近くの山道には今も石畳が残っている。自分の子どもが小さいころ道で通った」と鈴木さんは振り返る。

踏査隊は板谷から奥道を天沢方面に向かい、JR板谷駅からしばらく坂を上った山神橋付近で、旧街道の入り口を示す標柱を見つけた。そこから山道に入り、落ち葉に埋もれて分りにくくなっている石畳を確認。さらに進むと、沢沿いの美しい風景に出合った。沢があり、石畳があり、緑がある。もう少し整備すれば素晴らしい散策スポットになる」と矢口さんは目を見張った。



沢藩は国境の番所と城下の判所で通行許可証である通判を出し、人の往来や荷物の流通を統制した。藩政改革の一環として1775(安永4)年、領内を出入りする商人の活動を盛んにしようと三の丸にあった判所を城下町の大町に移し、夜中でも対応するように改めた。また、宿屋で行われていた通判の受け渡しを直接判所で行い、過大な料金を取られないようにした。

「西遊草の道」踏査後半は板谷からスタート。矢口代表ら「まちネット」の2人が実施した。明治に入って数々離れた粟子峠を通る「万世大路」が整備されると、板谷街道は廃れた。番所跡などを探してみたものの、宿場の面影はなかった。